あとがき

本研究ならびに本書は熟議民主主義と科学技術を主題に含むものであるが、研究代表者でもあり編集代表者でもある宮坂は、そのどちらについてもまったくの門外漢であり、残った法学についても、専門である古代ローマ法はそのごく一部を占めるのみであり、片足を歴史学に置いているという意味では半身を残しているのみ、とすら言えるかもしれない。そのような宮坂がひょんなことからこのような大役を仰せつかったのは、何かの巡りあわせであるという他はない。

実際、科学技術と法学、社会科学との関わりについては、共同研究メンバーの秋山先生が科学技術振興機構（JST）のムーンショット・ミレニア・プログラムに採択される等、多方面でご活躍であったことから、JST の関係者をご紹介いただいたことで話が進んできたわけであるし、熟議民主主義については、木山先生、平井先生がすでに長年進められてきたご研究に乗っからせていただいているところが大きい。法学についても、熟議の内容を「法律」「条例」「契約」という規範形式に落とし込むプロセスの研究は、星野先生のアイデアを参考とさせていただいている。強いて宮坂が貢献できることがあるならば、それは先生方のご研究をつなげて一つのストーリーを紡ぐことであろう。

宮坂がそのように決意するに至ったのは、個人的な経験に拠るところが大きい。筑波大学に着任した10年前、宮坂の脳裏をよぎったのは、幼い時に父母に連れられてきた科学万博つくば’85であった。目を見張るような巨大なパビリオン群とそこで体験した最先端の科学技術は衝撃的であった（当然、パビリオンの模型の作成がその年の夏休みの自由研究となった）。科学技術の力による明るく楽しい未来がやってくると信じて疑わなかった。しかし昭和が終わり、平成に入り、世の中のことが分かりかけてくると、バブル経済崩壊、阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、アメリカ同時多発テロ、リーマンショックと、思っていたのとは違う現実が目の前に広がっていた。そして着任直前に起きた東日本大震災と福島第一原子力発電所事故の後、恐る恐るつくばを訪れた宮坂の目には、パビリオンの消えた万博の跡地がどこか寂しげに映った。その時から、どうしてあの時見た明るく楽しい未来に、今ここにいる自分はいないのだろうか、という問いを心の中で考えるようになった。

他方でこの間、2度の政権交代を経験し、そのたびに日本の政治は良い方向に進むのではないかという期待を抱いたものの、その実感を得られないまま、現在なお同一の連立与党が長期にわたって政権の座にあり続けており、それによる弊害も多々指摘されている。と同時に、数年前、宮坂が知る学生たちの自主的な活動で、学内に投票所を設けるという快挙が実現されたにもかかわらず、実際の投票率は芳しくなく、学生たちが落胆していたのを目にすることがあった。その際に、現代の人々が政治にもっと関心を持つにはどうしたらよいのだろうか、という疑問がふつふつと沸いてきた。その中で、古代ローマ法の授業で、その源流である古代ギリシャの政治と民主主義に触れるたびに、どうにかして何かここから学ぶべきことはないのだろうか、と思わざるを得なかった。そうして、木庭顕『新版　ローマ法案内』（勁草書房、2017年）11頁の、政治には「厳密な議論の末に一個の一義的に明確な決定がなされ、これに社会全体が明確に従う」ことが必要不可欠である、という記述に出会い、熟議という考え方に導かれることとなった。

加えて、宮坂はいわゆる法学部、法学研究科で法学の教育・研究指導を受けてきたところ、筑波大学の学部レベルでは、法学は社会科学全般を教授する社会学類の一主専攻を構成するものであり、大学院レベルでは当初、つくばキャンパスにも法学専攻が存在したものの、2019年 3月末をもって消滅した。そのような中で、法学の研究教育を行うことの意義については、組織として法学部、法学研究科を備え、教員数が50名を超えることも珍しくない、他大学と同じことをやろうとしても意味がないのではないか、どうせやるなら筑波大学らしさを生かした、他にはない新しい研究教育を行うべきではないか、との思いを抱いてきた。

以上の考えを持ちながらも一人悶々と燻っていたところ、上述のとおり、先生方との巡りあわせを得て、本研究において一つのストーリーを語ってみようと決意した次第である。とはいえ、所詮は門外漢でしか

ない宮坂は、本研究ならびに本書の編集に取り組むにあたり、筑波大学内外の様々な方のご支援によって支えられてきた。

まず、意見交換会については、「戦略プロポーザル　複雑社会における意思決定・合意形成を支える情報科学技術」の取りまとめにおいて中心的役割を果たした福島俊一氏（JST CRDS フェロー）には、2021年 9月16日、JST の関本一樹氏の仲介で同プロポーザルと本研究とについて意見交換の場を設けていただき、貴重なご意見を頂戴した。また五所亜紀子氏、山本理枝子氏、花田文子氏には貴重なコメントをいただいた。リスクコミュニケーションについては、2021年10月11日に、JST CRDS 企画運営室フェローの五所亜紀子氏と、化学製品 PL 相談センター・日本化学工業協会の菅沢浩毅氏に、理論と実例とについてレクチャーしていただいた。

次に、講演会について、詳細は本書「研究プログラム情報」に記載したが、東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻（相関社会科学分野）博士課程の山口晃人氏には2021年10月26日に「熟議民主主義の現在」という題目で、ロトクラシー（籤引きによる民主主義）について、東洋学園大学現代経営学部教授の櫻田淳氏には2021年12月19日（日）に「熟議民主主義と安全保障―「普通の国」への道程を巡って」という題目で、1990年代以降の日本の安全保障政策の展開と、国内政治の兼ね合いについて、そして、神奈川大学非常勤講師の山田陽氏には2022年 2月 9日（水）に「熟議民主主義の政治理論について」という題目で、熟議民主主義の政治理論について、それぞれご講演をいただいた。いずれも本研究にとっての中核的な概念である熟議民主主義についての理解を深める上で貴重な機会となった。

さらに、シンポジウムについても、詳細は本書「研究プログラム情報」に記載したが、2022年 3月19日に、国際基督教大学教養学部 アーツ・サイエンス学科教授の山口富子氏には「社会における先端科学技術のあり方」という題目で、科学技術と社会科学の関係について、科学技術振興機構（JST）「科学と社会」推進部の関本一樹氏には「科学と社会をつなぐ―対話と未来社会デザイン」という題目で、JST「科学と社会」推進部が関わる様々な研究と実践とについて、それぞれご講演をいただき、パネルディスカッションにご参加いただいた。科学技術で熟議民主主義は実現できるのか、またそれは望ましいのか、という根本的な問題について有益なご示唆をいただくことができた。

そして、筑波大学関係者としては、関根久雄先生（人文社会系長）には申請書作成の段階からシンポジウムへのご協力まで全面的なご支援をいただいた。海後宗男先生（人文社会系教授、大学院国際日本研究学位プログラムリーダー）には短期雇用の事務手続を国際日本研究専攻事務室の事務員の方にご担当いただくことをご快諾いただいた。山本英弘先生（人文社会系准教授）、大倉沙江先生（人文社会系助教）には山本先生がプロジェクトリーダーを務める「プレ戦略イニシアティブ」と本研究との協力体制構築につきご尽力いただいた。齊藤愛氏（人文社会系 URA）にはシンポジウム、講演会、意見交換会に関する事務手続をサポートしていただいた他、これらに参加してメモの作成や写真撮影も担当していただいた。短期雇用従事者として、Fabio Henrique Kiyoiti dos Santos Tanaka さん、阿久澤ひかるさん、穴見蒼野さん、荒木田雪乃さん、上原紗帆さん、大山千聖さんには研究メンバーの各研究をサポートしていただいた。

以上、諸氏にあらためて心から御礼を申し上げたい。

そして、本研究の共同研究メンバーの先生方には、門外漢の宮坂に逐一適切な助言を与えていただき、ここまで導いてくださったことに、深く感謝を申し上げたい。今後、熟議サポートシステムの完成に向かって努力することが、ご協力いただいた皆様のご恩に報いることになると考える。共同研究メンバーの先生方と共に一歩一歩、歩んでいきたい。

最後に、本書によって宮坂が紡ごうとしたストーリーが読者諸賢に届くことを心から祈念する。そうであれば、このプログラムにおいて宮坂が負う債務の一つはひとまず履行された、と言えるからである。

2022年 2月14日

宮坂　渉